# 壮　士　節

## ～慎太郎刈りをば叩いて見ればコンセンサスの音がする

上　野　昂　志

幸か不幸かこの私ごときは、一見やくざ風などと言われることがあるが、さすればかの石原慎太郎などは、一見壮士風とでも呼んだらいいのかもしれない。とはいえ、壮士といっても、

風は蕭々として易水寒し
壮士ひとたび去って復た還らず

と歌って、ひとり秦王暗殺に向かった荊軻などの面影はなく、むしろ

野蛮の眠りのさめない人は
自由のラッパで起したい　開化の朝日は輝くぞ　さましておくれよ長の夢
ヤッテケモッテケ改良せ！
改良せ！

などと明治20年代に街頭で獅子吼していた壮士の方により近い。

だが、街頭で「ダイナマイト節」だとか、「ヤッツケロ節」だとか歌っていた壮士たちが、自由民権運動の弾圧の過程から生まれてきたものであるかぎり、そこには時の官僚政府に対立してあくまで自らの信念を民衆の間に拡めようとする情熱がたぎっていたに相違ない。とするならば、われらの慎太郎刈り元祖氏は、明治20年代の政治運動の産物であると同時に演歌の創始者であった壮士とは似て非なるものということになる。しかし、壮士にも色々あらあなというわけで、民権思想を歌う者もいれば、ダンビラをふりかざしてそれを蹴ちらす者もいるし、時の権力者のお先棒をかつぐ三百代言もいる。いずれにせよ彼らは、政治の季節の熱にうかされたように性急に、断言的に己れの信条をぶちまくっていた。そう、その断言的に自己の信念をぶちまくるところが、石原にそっくりなのだ。

さすがに選挙にうってでるだけのことはあって、『展望』十月号の『鳥目の日本人』という論文などは読んでいるだけで選挙宣伝カー上で熱弁をふるう石原先生の雄姿を想いうかべられるほどの出来栄だ。冒頭、日本および日本人は鳥目だ！という断言から始まるあたりてんでカッコいい。「貴下は何故に日本および日本人を鳥目と断定されるか」なんて愚問は無用ですぞ。とにかく鳥目だというんだから鳥目なんでしょう。特に私の如き戦争中に生まれたものは栄養失調で鳥目になる可能性はおおいにあった。

あだしごとはさておき彼の意見を聞こう。「鳥目である訳は、」彼は言う。「第一に、日本人の価値観、というより価値観におけるセンチメンタルともいえる絶対主義であると私は思う」と。その「価値観におけるセンチメンタルともいえる絶対主義」について、創価学会の排他主義、安保闘争の時における「所謂革新」の教条主義等を例証としてあげているが、結局石原の言いたいのは「コンセンサスの培養」ということなのだ。

「ヤッテケモッテケコンセンサス！」
「シンタロウガリをば叩いて見ればコンセンサスの音がする！」

そのコンセンサスをベトナム戦争に対して用いると次のようになるらしい。

「結局、平和もまた現実には利益効用でしかないという意識の上に、天下りの誰かが作りあげた論調ではなしに、一人一人がことを自らのこととして考え、その答えを寄せ集めればよいのであって、その結果が、矢張り、自らの国が不

況になるよりも、戦争は好ましくないがベトナム戦争のおかげを蒙ろうではないか。当分アメリカにせいぜいやってもらおうということになったとしてもそれが絶対のナンバーを占める日本人の総合意見なら、それは正しく民主的なコンセンサスであって有無はないのだ。一人一人が自らに他人の戦争と自らの貧乏とどちらがいいかを秘かに問い直し、その答えを率直に選ぶくらいの労はとってもいいではないか。」

「それは正しく民主的なコンセンサスであって有無はないのだ」なんてところは、「有無は言わせぬぞ」と言ってるように見えるが、それは単に鳥目のひが目かもしれない。

ところで、「他人の戦争」と「自らの貧乏」というのが、ベトナムに対するコンセンサスを作る上での基準になっているらしいが、その問いかけ自体が石原の非難する二元論的選択になっているから笑わせる。現在のベトナムを固定的に眺めて、「他人の戦争」と「自らの貧乏」といった観念的な命題におきかえれば鳥目がなおるというんだから、これはいいクスリができたもんだよ。まるで傷の万能薬ガマの油みたいだ。そういえば、そのタンカもよく似ている。ゆすり、カタリ、やじりきり（家尻切）といった連中が、「自らの貧乏」より「他人の戦争」がマシという前提に立って石原を襲わないのが、私には不思議でならない。この前提を踏まえている限り、彼らは石原から文句を言われるきづかいはないのに。

次に、「日本という巨人を鳥目にしているその第二の病因は、この国に於ける革新の虚構である」そうだ。なるほどと思ってついていくと、次のくだりにぶつかって私はおもわず、「ヒェーッ、変り果てたるこの姿、あれあさましや」なんて、四谷怪談のお岩さんが毒を飲まされた後、鏡をのぞきこんで叫んだ時のようなセリフを吐いてしまった。

「所謂革新の内質の構造が、論理ではなく、既成の権力に表象される現体制への反感に基いて出来上った、心理的な反体制であるというところに誤謬があり古色蒼然たるイデオロギーの実現を目指すというのならば、日本という社会の発展次元をわきまえぬ暴挙であり、一応出来上りかけたこの社会に対する騒擾として許せまいが、そうした非現実性は革新とてもう充分知りつくしている筈だろう。彼らとて全学連とたもとを分つだけの良識はまだあるのだから。」（傍点筆者）

かつて太陽族を「価値紊乱者の光栄」と讃え、安保闘争の頃は「刺し殺せ！」などとわめいていたものが、今ではどこかで聞いたような「暴挙」だとか、「騒擾とじて許せまい」とか「全学連とたもとを分つだけの良識」などと並べたてているのを見ては、やはり「あさましや」と言わずにいられない。ここまでくれば、おあとは皆様御存知、「良識的保守」とお手手つないで「我我国家国民の利益」を目指して勇往邁進して下さるとのこと、まことに紋切型、何はなくともコンセンサス！で幕。

さて、ここまで書いてきて、私はいささかアホくさくなってしまった。確かに石原は59年には、状況に対しての「不満、不安が革命や社会改革と結びつかぬ限り、我々は周囲に加速度的に増加する犯罪或いはノイローゼにその姿を見るだろう」と書いていたが、その現実認識と現在のそれとは表面上違うように見えても、本質的には変っていないのだ。あの時も現在も、彼の視線は社会状態の上にそそがれているだけで、それを現象させている独占体制にまでは届いていないのだ。だから、若さ故に自らの周囲をいらだたし気に眺め、年と共にそこへ同化していったとしても、何の不思議もない。所謂彼も又、ひとつの現象にすぎないのだ。では何故そんな石原をここにひっぱりだしたのかというと、それはテレビのせいだ。テレビで彼が若々しく誇らし気に天下国家を論じているのを観てカチンときてしまったのだ。げにテレビとは恐しきもの。

（67年9月22日）